北塩原村の歴史・文化・自然　第３集

国指定史跡

柏木城跡

北塩原村教育委員会

はじめに

北塩原村は、磐梯山・裏磐梯など東北地方有数の自然景観に恵まれた地域で、磐梯・朝日国立公園の一部がふくまれています。

村では、豊かな自然に加え、村内に残される城館群や会津・米沢街道などを〝先人の歩み〟という時間的な奥行きを有する歴史資産としてとらえ、体系的な調査をおこなうため調査委員会を立ちあげ、平成二〇年度からその調査・研究や活用について検討をはじめました。

そのなかでも柏木城跡は歴史的にも重要とされたことから、適切な保存と活用をおこなうためにも国史跡を目指すことになりました。柏木城跡は北塩原村大字大塩にあり、大塩川に面する山地の尾根上に造られています。尾根には主郭曲輪群が設けられ、その東に馬出曲輪群、西・北の山麓に西曲輪群と北曲輪群が配されています。ふもとには宿場であった大塩集落があり、大塩川沿いには会津と米沢を結ぶ江戸時代の米沢街道が通じていて、いずれも文献史料に記録が残されています。

平成二六年度からは、柏木城跡について、文化庁国庫補助事業により内容確認のための発掘調査を開始して、令和元年度までの六年間実施し、調査報告書を刊行しました。その後も文化庁や福島県文化財課のご指導の下、地元や地権者の方々等多くの関係者のご協力を得て、令和四年三月一五日、柏木城跡は国の史跡に指定されました。

本書は国史跡指定を記念した柏木城跡の解説ガイドブックです。

もくじ

はじめに
もくじ
一　柏木城跡の現在
二　柏木城の時代
三　柏木城跡の発掘
四　柏木城跡の特徴
五　柏木城跡の性格
六　柏木城跡関連年表

《表紙解説》
中央の山が柏木城跡。手前は会津と米沢を結ぶ街道。右奥の雲海の下に会津盆地が広がる。令和３年12月、大塩の八丁壇一里塚周辺から撮影。

北塩原村『柏木城跡』へのアクセス

①磐越自動車道猪苗代インターチェンジから国道４５９にて裏磐梯を経由して大塩へ。
②磐越自動車道会津若松インターチェンジから会津北縦貫道路にて喜多方へ。国道１２１から国道４５９へ右折して大塩・裏磐梯方面へ
③ＪＲ喜多方駅下車。アクティブリゾーツ裏磐梯行きバスで「下六郎屋敷」バス停下車

一　柏木城跡の現在

《１　柏木城跡航空写真・測量図・遺構配置図》

二　柏木城の時代

米沢街道　柏木城跡のふもとには米沢街道が通っています（図2－1）。会津（黒川）から米沢へは塩川（現 喜多方市）、大塩・桧原（現 北塩原村）、綱木・関（現 米沢市）を経て米沢へ至る道が最短ルートでした。この道は江戸時代には街道として整備され、会津では米沢街道と称されています。それ以前については、天正年間、伊達輝宗書状（伊達家文書）に輝宗が蘆名盛氏に送った使者が大塩にとどまったことが記されており、中世においてもこの道筋が使われていたことがわかります。本書では、この中世の道を「米沢路」と呼称します。

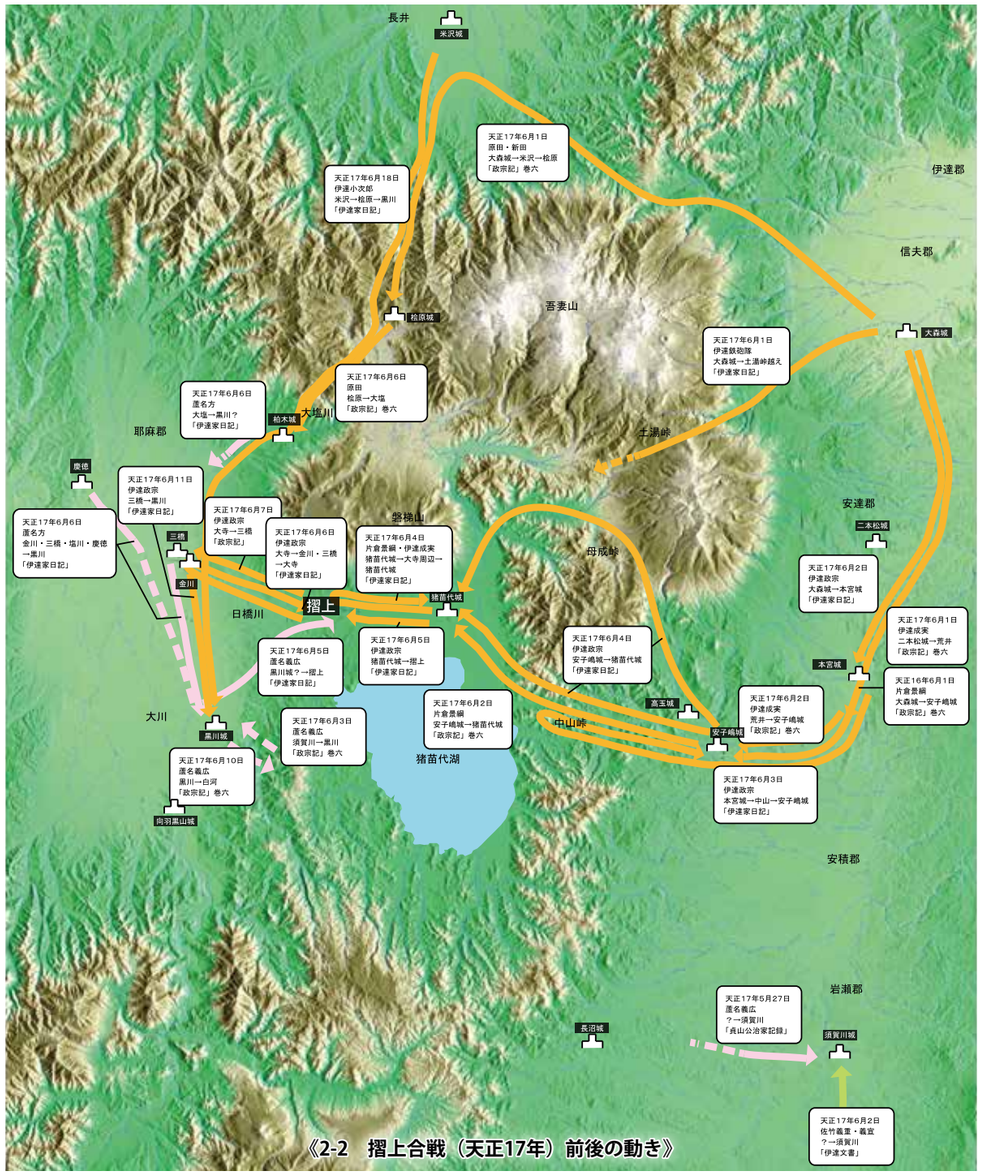
蘆名氏　中世会津の雄、蘆名（葦名）氏は、相模国三浦郡葦名を領していた三浦一族に連なります。黒川（現 会津若松市）に住み、十五世紀後半の盛滋の頃に会津一円での支配を確立したようです。十六世紀中頃、蘆名盛氏の代にはその支配領域が最大となり、室町幕府からは、奥羽において蘆名家と伊達家が大名格（永禄六年諸役人附）とされていました。会津の北方（現 喜多方市・北塩原村）付近では、明応九年（一五〇〇）の蘆名盛高による松本対馬攻めや、永正二年（一五〇五）に蘆名盛高・盛滋父子の争いなどが起き、北山漆地区の綱取城はその舞台となりました。また、永禄七・八年頃の伊達輝宗による桧原攻めや、天正十三年には伊達政宗による会津侵攻があり関柴の松本備中守が政宗に内応するなど、伊達家領国と接している地域のためか、蘆名家と伊達家に絡んだ衝突の地となることも多い土地柄でもありました。

蘆名氏不穏　天正二年、蘆名家督の盛興は若くして亡くなります。盛興に継子はなく、父の盛氏は人質としていた二階堂盛隆（須賀川領主二階堂盛義の長男）を婿入りさせ、後継ぎとしました。しかし盛氏は天正八年に没し、盛隆は天正十二年（一五八四）、家臣に殺害されます。盛隆の子、亀若丸も幼少で、この頃、蘆名家中は大きく揺らいでいたと推察されます。

柏木城の築城　柏木城の築城・整備については、天正十二年十月にそのきっかけとも思われる出来事がありました。蘆名家が、当主盛隆の死去に伴う後継ぎを幼児亀若丸とし、常陸佐竹家との関係を強化する方針を取ったことです。その後、伊達家では、ほぼ間をおかずに政宗が家督を継いだとみられ、政宗は会津を含めた地域に向かい南侵の方針を取ります。伊達家は会津領桧原の調略をすすめ、天正十三年五月には桧原を略取します。この出来事により、蘆名家としては、政宗軍の「米沢路」からの会津進入阻止が喫緊の課題となりました。

柏木城は、この天正十二年十月から天正十三年五月までの間に、「米沢路」桧原口への備えとなる大塩地区において、蘆名氏の領国防衛を目的として整備されたとみることができそうです。

《2-1　柏木城と「米沢路（よねざわみち）」》



《2-2　摺上合戦（天正17年）前後の動き》

伊達政宗　伊達成実が後に記した「政宗記」には、伊達政宗が、桧原略取後さほど日を置かず伊達勢総軍での大塩峠越えによる大塩進軍を試みていることと、その結果、合戦にいたらず引き返したことが記されています。政宗は「道が一筋のみで陣を立てる場所がない」ことを理由に引き返したと伝わりますが、これは、「米沢路」からの会津侵攻を目的としつつも、柏木城の存在を前に陣立てができず、目的が果たせなかったことを示していると考えられます。その後も政宗の桧原在陣中には、大塩への別ルートとなる取上峠越え道が確認されたという報告があったことや、天正十七年六月五日摺上における伊達氏対蘆名氏の合戦後、原田宗時による大塩・柏木城確認の記録などが残されており、伊達家の残した史料からは、柏木城が意識されつづけていたことが読み取れます。

三　柏木城跡の発掘

柏木城跡の発掘調査　柏木城跡の発掘調査は平成二六年から令和元年度にかけておこなわれました。城内主要箇所の発掘は、遺構の遺存状況や出土遺物からの年代の確認等を目的としたものです。小規模ながら三一か所のトレンチ調査をおこなうと同時に、地形観察に基づく地形測量を約一七八〇〇〇㎡実施しました。令和元年度にはその成果をまとめ、発掘調査報告書を刊行しています。

石積　柏木城跡で目立つのは、主郭曲輪群の土塁に普請された石積です。石積は、発掘調査をする前から城内の一部で露出していて、土づくりの山城が一般的な東北地方戦国時代の山城としては稀な事例として注目されていました。

主郭の発掘調査では、主郭内を区画する土塁や主郭の周りに造られた土塁の内側に石積が積まれていることが確認されました。さらに、主郭への通路にある出入口の虎口1・2（3－1・3）、主郭に向かう帯曲輪1南通路・東通路の土塁側面でも石積が確認されています。現在に残る土塁上にある石列の分布状況を踏まえると、石積は主郭曲輪群にある土塁の内側ほぼ全体に普請されていると推定されます。虎口1には織豊城郭の虎口でみる「鏡石」に似た特徴をしめす大きく平らな石（3－2）も据えられるなど、石積にも多彩な種類があり、大規模に石積が施されているようすからは、柏木城跡が、〝石造りの山城〟ともいうべき内容を有していることが明らかとなりました。

主郭曲輪群の発掘調査　これまでにおこなった発掘調査（3－5）では、主郭から、掘立柱建物（4－4）や竪穴状遺構、石積（4－5）、石組（3－6）、炉跡（3－7）などが検出されています。掘立柱建物や炉跡は、主郭に一定期間、人がいたことの証として理解できます。石積は、一人ないし数人で持てる程度の築石を用いて（3－3）、表側の

《3-1　虎口1　石積検出状況》

《3-2　虎口1　大平石（「鏡石」）》

《3-3　虎口2　通路壁面の石積》

《3-4　帯曲輪1弧状施設の石積》

面を揃え、長径を横にしてならべており、面をほぼ垂直に積み、高さは1m程度とする例が多くみられます。

遺物は、主郭トレンチ1の竪穴状遺構底面直上から十六世紀後半とみられる天目茶碗片（3－12）や輸入染付磁器碗（3－9）の破片が出土しています。また、主郭の各調査区からも、輸入染付磁器（3－10）や、瀬戸美濃産灰釉陶器（3－13・14）、越前産陶器（3－15）など、十六世紀後半の陶磁器片が出土しています。これは文献史料に見る柏木城が機能していた時期が収まる年代の資料です。

それらとともに、十六世紀末から十七世紀初頭とみられる瀬戸美濃産志野焼丸皿や、ごく細片が多いものの十八世紀以降の陶磁器類も出土していることから、柏木城の跡地では近世初頭以降も何らかの活動があったものと考えられますが、これらの遺物については現在のところ城内の遺構に伴って出土することは見受けられません。

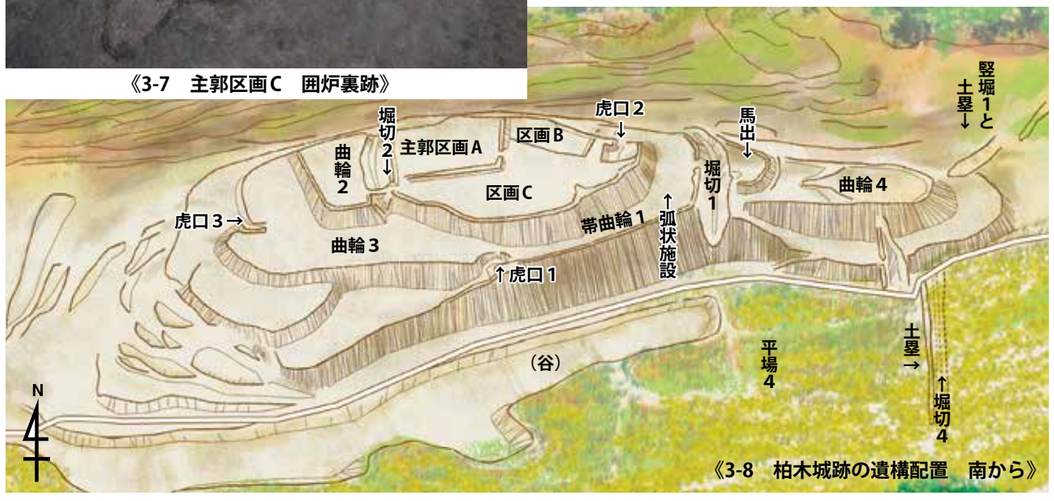
これらの出土遺物の時間的位置づけや石積の類似性などにより、発掘調査により主郭で検出した遺構や虎口・堀切・土塁などについては、その多くが文献史料に書かれている柏木城が機能していた天正後半期（十六世紀後葉）のものと理解しています。

東側遮断線　主郭曲輪群の東には、堀切1を挟んで馬出曲輪群が造られます（3－8）。馬出曲

《3-5　主郭区画A発掘調査のようす》

《3-6　主郭区画A　竪穴（手前右）と石組（手前左）》

《3-7　主郭区画C　囲炉裏跡》



《3-8　柏木城跡の遺構配置　南から》

《3-11　輸入灰青沙器碗　主郭区画C》

《3-10　輸入磁器鉄絵盤　主郭区画C》

《3-9　輸入磁器染付碗　主郭区画A》

《3-14　瀬戸美濃産陶器皿　主郭区画C》

《3-13　瀬戸美濃産陶器皿　主郭区画A》

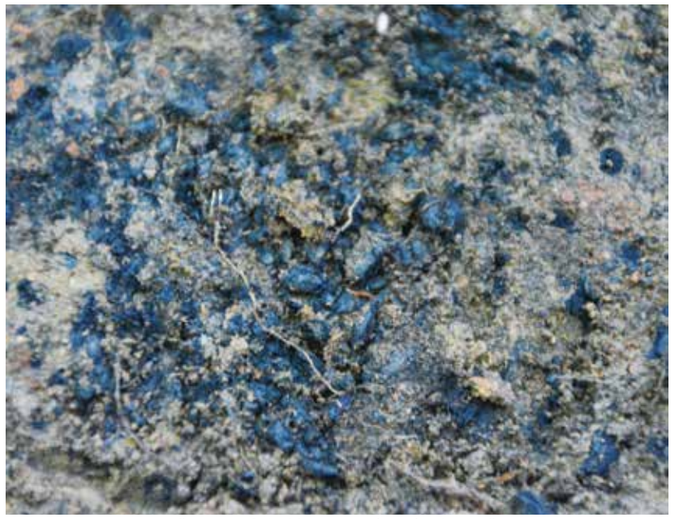
《3-12　天目茶碗　主郭区画A》

《3-17　鉄製角釘　主郭区画A》

《3-16　信楽産陶器壷　馬出》

《3-15　越前産陶器甕　主郭区画A》

《3-18　鉄製鉈　堀切2》


《3-19　炭化種子　ムギなど　堀切2》

輪群は、馬出・曲輪4を中心としており、その両翼に防御施設や曲輪を設け、柏木城跡の東側に対する攻撃・防御双方を重視した曲輪群となっています。この城は、従来、東側からの敵の侵攻に備えた山城と目されてきていましたが、その理由はこの馬出曲輪群での遺構の配され方にあります。

馬出曲輪群の南と北には当時の土塁とみられる遺構が一部遺存しています（3－20・22）。ここを、南東調査区、北東調査区として発掘調査をおこなったところ、各所で土塁の基盤と堀の跡が確認され（3－21・23）、馬出曲輪群の曲輪4を中心に堀（竪堀1・2、堀切4・5）と土塁の複合した防御のための長大な遮断線が設けられていることが確認されました（4－1）。

《3-20　東側遮断線南側　堀切4に伴う現存土塁》

《3-21　東側遮断線　堀切4の発掘と現存土塁（奥）》

《3-22　東側遮断線北側　竪堀1と土塁》

《3-23　東側遮断線北側　発掘された堀切5と土塁想定ライン》

馬出曲輪群の東側は、緩やかな尾根と緩斜面が広がっています。柏木城跡の北・南・西側が斜面や急崖になるのと異なり、守備が難しい地形となっています。しかしこの東側の遮断線が、曲輪4の北側で約八〇m延びて大塩川河谷へ下る急崖に接続し、南側では約一一〇m延びて登り斜面に接することで尾根上の緩斜面を塞いでおり、防御面での地形的な課題を克服しています。

城内を通る道　曲輪4の南側から柏木城内に入る道は、現在も農道として使われている幅約2mの道で、柏木城跡主郭・馬出曲輪群の南側を通り、北東にすすむと大塩集落で旧「米沢街道」（ここでは「道A」・「米沢路」と呼びます）・現在の国道459号に接続し、西では大久保集落を経て同じく「米沢路」に接続します（14頁5－2）。この道は、南東調査区での発掘調査の結果、堀・土塁の間を折れ曲がって通ることが明らかとなりました。堀・土塁と強く結びついていることから柏木城が使われていた頃にも存在していた道（ここでは「道B」・「米沢路支道」と呼びます）と判断できます。

「道B」・「米沢路支道」の〝発見〟は、柏木城跡についてのイメージをあらためて問い直すきっかけとなりました。

四　柏木城跡の特徴

柏木城跡の遺構配置　柏木城跡は、城全体の中心となる主郭（曲輪１）と、城番の居住空間とみられる曲輪２およびその周辺からなる主郭曲輪群を中心に、東側には防御・攻撃双方を考慮した馬出曲輪群がおかれ、山麓（さんろく）には軍勢の駐屯地（ちゅうとんち）とみられる西曲輪群や北曲輪群が配されています。

主郭曲輪群　主郭曲輪群は、主郭（４－３・４・５・６）・曲輪２・曲輪３・平場１・平場２・帯曲輪１などから構成され、南の虎口１（４－11・12）・北の虎口２（４－13）・西の虎口３の三か所に出入口が配されています。主郭内の区画土塁や主郭へ向かう大手道（帯曲輪１－南通路・東通路）の土塁・出入口などには、区画や通路の内側に石積が大規模に配されており、見る者を圧しているかのようです。これは、城郭外側にあたる切岸（きりぎし）には虎口１の一部などを除いて石積が確認されていないことや、主郭北側の通路（帯曲輪１－北通路）には石積はおろか土塁自体が設けられないことと対照的です。

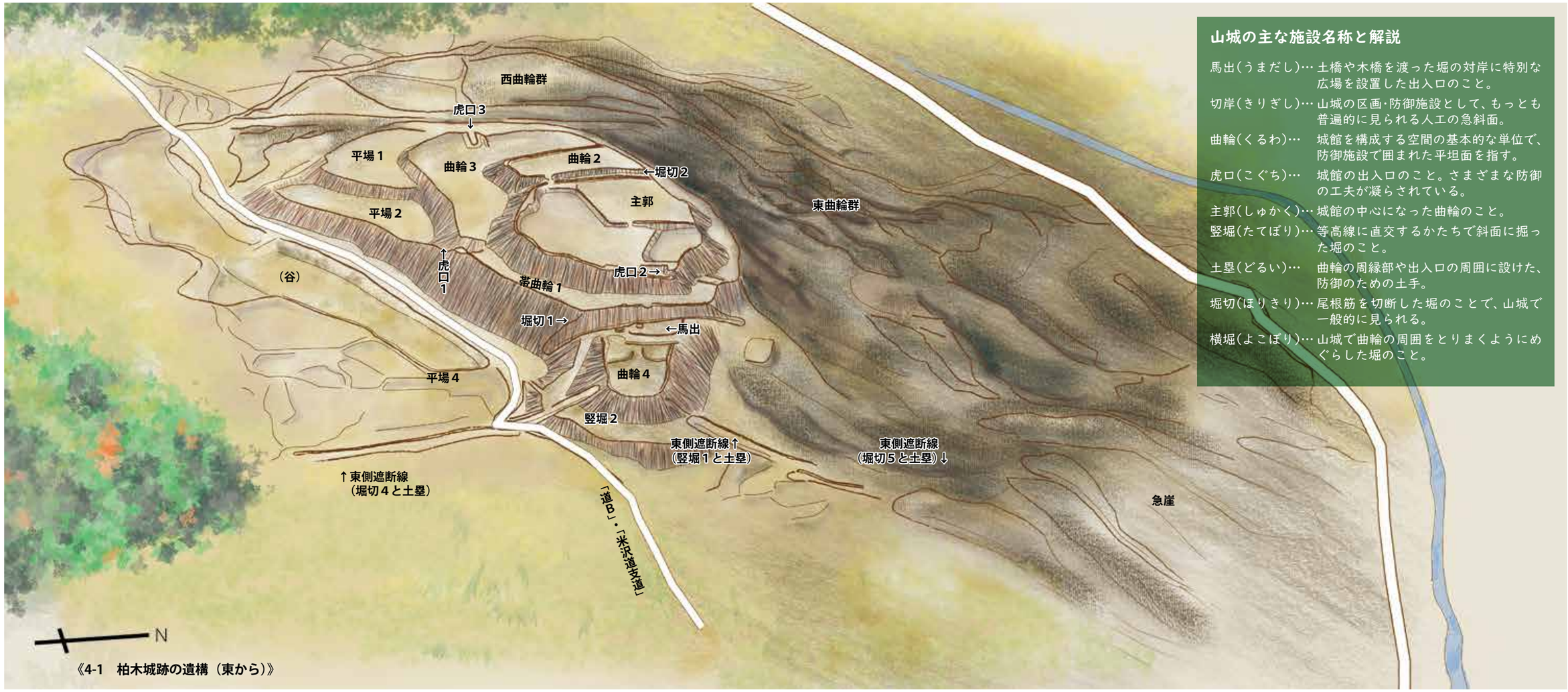
米沢路支道　城の南側で谷との間を縫うように通された「道Ｂ」は、大塩地区と大久保地区を繋ぐ道です。さらに両端で桧原・米沢と黒川（若松）を結ぶ〝米沢路〟に接続し、いわば「米沢路支道」と理解される道です。城の南側に対しては主郭曲輪群・馬出曲輪群がそれぞれに土塁・切岸・出入口を幾重にも重ねて、この「米沢路支道」に対する強い意識を見せています。

この支道から主郭へ至る大手道は、石積の壁がある通路となっていますが、土塁の高さは１ｍ前後とさほど高くありません。

遺構配置　馬出曲輪群は主郭の東にあり、主郭から東側の戦闘領域前線への出撃を〝馬出〟型の出入口で確保しつつ、高さがあり橋頭保（きょうとうほ）ともなる曲輪４を中心とした防御線を城の東に展開しています。その右翼には平場４が配され、その東を竪堀２・堀切４と土塁で遮断しています。左翼に配される平場５は、竪堀１・堀切５と土塁により東側からの侵攻を強く遮断しています。遮断ラインの総延長は約２００ｍあり、鶴翼の陣形を地上に写したかのようなこの遺構配置からも、柏木城は、東からの伊達政宗勢の侵入に備えた城であると判断されます。

一方で城の南東では竪堀２・堀切４と「道Ｂ」が交差する場所において、二重に配された堀・土塁をくい違いとし、その間に「道Ｂ」を折り曲げて通す工夫（４－16）も確認されます。この部分については、曲輪４・帯曲輪２など、高い位置から十分に監視し攻撃できるような造りになっています。強い遮断性のある場所に狭い通路を導き入れることで、防御性をより高める工夫とするとともに、小規模な人数の往来は確保する考え方を読み取ることができます。

また主郭の北・西側の斜面を下った場所には、大規模に広がる平場群が確認されます。会津領国を守る軍事要塞として多くの城兵を確保する必要があることから、多数集まった兵が駐屯する空間の可能性があります。



《4-1　柏木城跡の遺構（東から）》

山城の主な施設名称と解説

馬出（うまだし）…土橋や木橋を渡った堀の対岸に特別な広場を設置した出入口のこと。
切岸（きりぎし）…山城の区画・防御施設として、もっとも普遍的に見られる人工の急斜面。
曲輪（くるわ）…城館を構成する空間の基本的な単位で、防御施設で囲まれた平坦面を指す。
虎口（こぐち）…城館の出入口のこと。さまざまな防御の工夫が凝らされている。
主郭（しゅかく）…城館の中心になった曲輪のこと。
竪堀（たてぼり）…等高線に直交するかたちで斜面に掘った堀のこと。
土塁（どるい）…曲輪の周縁部や出入口の周囲に設けた、防御のための土手。
堀切（ほりきり）…尾根筋を切断した堀のことで、山城で一般的に見られる。
横堀（よこぼり）…山城で曲輪の周囲をとりまくようにめぐらした堀のこと。

《4-3　主郭区画Ａ　発掘調査のようす》

《4-2　中央の森が柏木城跡　手前の集落が大塩》

《4-5　主郭区画Ａ・Ｃを分ける区画の石積》

《4-4　主郭区画Ａ　掘立柱建物跡》

《4-7　主郭区画Ｃの調査区》

《4-6　主郭東側土塁の石積》

《4-9　堀切2　堀底から鉈や炭化したムギが出土した》

《4-8　堀切2　主郭(右)と曲輪2(左)を分ける》

《4-11　虎口1　西壁の石積と崩れた石》

《4-10　虎口1　奥から2回折れて内側へ入る》

《4-13　虎口2　見学会のようす》

《4-12　虎口1　南側の石積。平石を立てて使用》

《4-15　帯曲輪1弧状施設の石積》

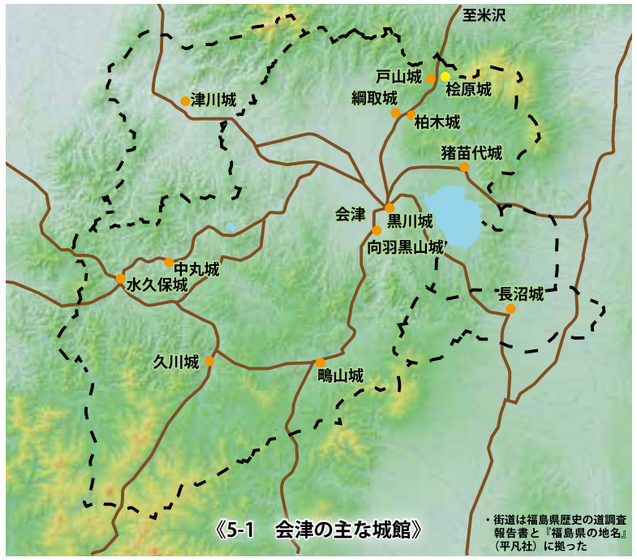
《4-14　帯曲輪１東側　弧状施設の石積》

《4-17　南側の切岸》

《4-16　東側遮断線を通る「道Ｂ」》

五　柏木城跡の性格

蘆名氏関連の城　蘆名氏の本城であったのは黒川城です。その場所は現在の若松城（鶴ヶ城）あたりとされますが、詳しくはわかっていません。向羽黒山城（会津美里町）は、蘆名盛氏による築城で、永禄四年に築城がはじまり、永禄十一年に完成したと伝えられています。盛氏の隠居城といわれていますが、東北でも最大級の広大な城域があり、多くの曲輪群、堀、土塁や城道・虎口が複合した城構えは、将来的な蘆名家の本城・居城として意図されていたと考えられています。



《5-1　会津の主な城館》

蘆名家家臣を置いたとみられる城には、綱取城（松本氏）、戸山城（穴澤氏）、津川城（金上氏）、長沼城（新国氏）などがあります。また、蘆名氏のもとで同盟関係にある地域領主（旗下）の城と推測されるのは、猪苗代城・鶴峯城（猪苗代氏）、鴫山城（長沼氏）、久川城（河原田氏）などがあります。

各城館の地理的な位置を確認すると、蘆名氏居館の黒川城は、会津盆地の南東に位置し、領外へと通じる各交通路の結節点にあります。向羽黒山城は黒川から南の白鳳山に連なり、眼下に会津盆地のほぼ全体を見渡しつつ、南山通り下野街道や阿賀川（大川）など、陸上交通と河川交通を押さえた立地となっています。一方、支城及び旗下の城は他の領国からの往来を押さえる位置に配されていることが読み取れます。

柏木城は、位置的には伊達氏のいた米沢と会津を結ぶ幹線道路「米沢路」に接しており、他地域との往来を押さえる場所という点で他の城と共通しています。

しかし「寛文五年大塩組風土記之帳」の記述にもとづけば、蘆名家から三瓶大蔵が〝城番〟として派遣された蘆名氏直営の城であり、地域領主の城館ではないとみられる点に、他の蘆名氏関連城館とは異なる性格を有していると理解できます。

柏木城跡の性格
〝政宗への備え　往来監視と石造りの城〟

以上、柏木城跡の城の造りや地形との関わり、文献史料などをみてきました。これらによれば、蘆名氏による柏木城築城・整備の意図は、桧原を略取し南侵の意図を明らかにした伊達政宗の侵攻に備えてのものであることが最も大きな理由であると言えるでしょう。そのため、多くの谷筋が集まるここ大塩の地で、大塩川沿いの難所を通る「米沢路」を旧大塩宿上手の谷が狭くなる箇所（5－2）で塞ぎつつ、「道B（米沢路支道）」を通じて、堀・土塁による厳重な遮断線があり多数の兵力を配備できる柏木城を経由させることにより領国会津を防衛する構想があったことが読み取れます。

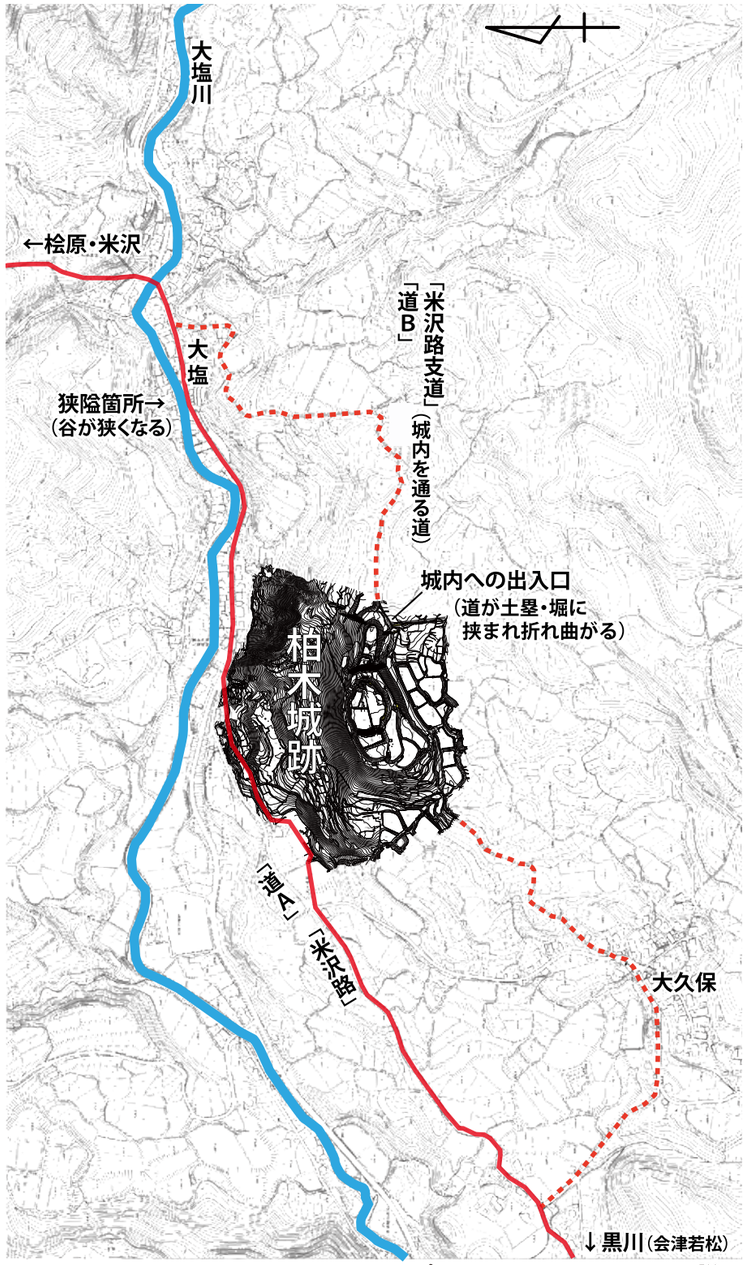
また、柏木城の曲輪4南にある「道B」の折れ曲がった箇所は、城内への入口となることから、「関（関所）」的な機能を配したことも想定されます。

加えて、蘆名氏は、柏木城主郭や主郭へ至る大手道の内側で石積壁を大規模に普請し重厚な城としました。土づくりの城が多かった会津の地では、柏木城を見せることで武威を示し、戦意を高揚させることに一役買っていたかもしれません。

柏木城跡の歴史的価値　柏木城跡は、戦国時代末期、会津領主蘆名氏により奥州会津と羽州米沢を結ぶ街道沿いである大塩に造られました。

南奥羽の覇権をめぐる蘆名氏と米沢伊達氏の戦いにかかわり、蘆名氏が領国を防衛するため、山城と「米沢路」を組み合わせて築いた軍事的な城であるという特徴をもちます。

天正十三年（一五八五）の伊達政宗による会津侵攻の際に蘆名軍が立て籠もったことや、天正一七年（一五八九）、摺上での合戦後に伊達勢により大塩の城の動向などを確認したことが「伊達天正日記」にあり、文献史料からは、その築城・整備・廃城は、天正十三年（一五八五）頃から天正十七年（一五八九）と推定されます。



《5-2　柏木城跡と道》

発掘調査により出土した陶磁器には、中国産染付磁器、朝鮮半島産灰青沙器などの輸入陶磁器や、瀬戸美濃産陶器皿類、信楽産陶器壺、越前産陶器甕などの国産陶器があり、十六世紀後半の資料が中心です。ほかには硯、釘、鉈、金具類などや炭化したムギなども出土しており、山城における当時の暮らしぶりを垣間みることができます。

国指定史跡『柏木城跡』　柏木城跡は東西500m、南北450mの広大な城域を有しています。遺構の残りがよく、石積を多用することや、複雑な形状の虎口を有するなど、戦国期の最新の技術を採用していることも確認されています。せまりくる伊達政宗勢を迎撃するため地形を活かして配した馬出曲輪群は、当時の南東北において蘆名氏伊達氏という二大勢力の抗争を具体的に示す遺構です。また米沢路を城内へ取り込むことにより城に「関所」的な意味合いを持たせたとみられることや、主郭曲輪群の区画や虎口・通路の壁内側へ石積を大規模に普請することなどからは、領国境目での軍事拠点のあり方や、家臣・旗下・領民への示威行為等の具体像を知ることができる遺跡です。

柏木城跡は、中世会津領主蘆名氏の領国防御の思想や築城技術を知る上で重要な遺跡であるとして、令和四年三月一五日、国史跡に指定されました。

六　柏木城跡関連年表

西暦	和暦	日付	出　来　事
1561	永禄4年		蘆名盛氏、向羽黒山城(岩崎城）の築城をはじめる。
1563	永禄6年		蘆名盛氏、向羽黒山城(岩崎城）に入る。家督を盛興に譲る。
1574	天正2年		蘆名盛興死去。盛氏は二階堂盛隆を養子とし後継とした。
	天正6年？		伊達輝宗が蘆名盛氏に使者を送るが、使者は会えずに大塩にとどまる。
1580	天正8年	6月	蘆名盛氏死去。
1581	天正9年		蘆名盛隆、織田信長に使者を送り馬や蝋燭などを進上（信長の居城は安土城。天正7年築城）
1584	天正12年	10月6日	蘆名盛隆、死去。蘆名家後継は亀若丸とし、常陸佐竹家との関係強化に舵を切る。
1584	天正12年		伊達政宗が家督を継ぐ。
1585	天正13年	5月2日	伊達家家臣原田宗時が柴野（現 喜多方市）を攻めるが、米沢に引き返す。
1585	天正13年	5月3日	伊達政宗が桧原（現 北塩原村）を攻め、略取する。桧原にいた蘆名勢は大塩へ引き城（柏木城）に籠る。
1585	天正13年	5月8日	伊達政宗軍、大塩峠を越えて大塩に迫るも、桧原へ引き返す。
1585	天正13年		政宗は57日間桧原に在陣し、桧原の城（小谷山城）を築城する。大塩と桧原で睨み合いが続く。
1585	天正13年		蘆名家は、大塩の城（柏木城）を、桧原口の守りとする。
1586	天正14年	10月	蘆名亀若丸が死去。
1587	天正15年	3月	佐竹家次男の義広が蘆名家の家督を継ぐ。
1589	天正17年		伊達政宗は天正13年に小手森、天正14年に二本松、天正17年に安子島、高玉の各城を落とし、猪苗代に入る。
1589	天正17年	6月5日	摺上（現 磐梯町磨上）で、蘆名勢と伊達勢が合戦。伊達勢が勝利する。
1589	天正17年	6月6日	原田宗時が大塩と柏木城のようすをうかがうが、蘆名勢は引いた後であった（「政宗記」）。
1589	天正17年	6月11日	伊達政宗が黒川（現 会津若松市）に入る。蘆名義広は前日に白河へおちのびる。

《柏木城跡周辺航空写真》

北塩原村の歴史・文化・自然　第３集
『国指定史跡　柏木城跡』
２０２２年６月　刊行
作成・発行　北塩原村教育委員会　〒９６６－０４０２　福島県耶麻郡北塩原村大字大塩字下六郎屋敷２１３４
TEL：0241-23-5236　Email：k-kouminkan01@vill.kitashiobara.fukushima.jp
印　　刷　三洋印刷株式会社　〒９６５－００５３　福島県会津若松市北町上荒久田字鈴木１６３